



奈良市第4次総合計画

後期基本計画

序論



序 論

1 総合計画策定の経緯

総合計画は、市政運営の根幹となるまちづくりの目標を明らかにし、これを達成するための基本方針を示すものです。

2001年(平成13年)2月に策定した「奈良市第3次総合計画」が、2010年(平成22年)に目標年度を迎えたことから、これまでの計画による成果と課題を踏まえ、人口減少社会の進行をはじめとする近年の社会経済環境の変化に対応した新しいまちづくりの目標を示すため、「奈良市第4次総合計画」を策定しました。

【総合計画の変遷】

1982年 奈良市基本構想

1984年 奈良市基本計画

「未来にのびゆく国際文化観光都市

－伝統と調和のとれた新しい住みよいまちづくり」



1991年 奈良市新総合計画

「歴史と自然と生活文化が織りなす、

創造と交流の世界都市－奈良」



2001年 奈良市第3次総合計画

「世界遺産に学び、ともに歩むまち－なら」



2011年 奈良市第4次総合計画

「市民が育む世界の古都奈良

～豊かな自然と活力あふれるまち～

2 奈良市の概況

1 まちづくりの歩み

●奈良のはじまり

「ナラ」という地名の由来には諸説あり、『日本書紀』の崇神天皇の条に「那羅山」の名が見られるほか、一般に古代人の住居に適したなだらかな丘陵地を意味する平地（なるじ）、平（なら）などのナラとする説や、渡来人の居住地を古代の朝鮮で国を意味する言葉からナラと名付けたことから、ナラの地名がおこったとする説もあります。

ナラは、奈良時代の官用には主に「平城」と記述され、平安時代以降は「奈良」が広く用いられるようになりました。

●平城京と「南都」奈良

710年(和銅3年)に都が藤原京から平城京に遷されてから70余年の間、奈良は、古代日本の首都として栄え、天平文化の華を咲かせました。

都が奈良から遷されると政治都市であった平城京は荒廃しましたが、平城京に建立された諸大寺はそのまま残され、奈良は社寺の都として生まれ変わり、政治の中心である平安京に対して、南都と呼ばれるようになりました。

●寺社の発展と商工業の成長

東大寺や興福寺が発展するにつれ、寺の事に携わる者など、寺のまわりに住む人が増えて「郷」（ごう）と呼ばれるまちができ、商工業の発展に伴い新しい郷が生まれ、13世紀には今日の奈良のもとがほぼ形づくられました。

江戸時代初期の奈良は、奈良晒をはじめとする産業の町として活気を呈しました。戦国時代の兵火で焼け落ちていた大仏が復興された江戸時代中頃からは、奈良見物に訪れる人が多くなり、奈良はしだいに観光都市としての性格を強めていきます。

●奈良県の誕生と県都奈良市

明治維新の後、1871年(明治4年)の廃藩置県により奈良県が誕生しますが、一時期堺県や大阪府に合併されたため、近代都市化が立ち後れてしまいました。

1887年(明治20年)奈良県が再設置され、奈良に県庁が置かれました。1889年(明治22年)には町制がしかれ、1898年(明治31年)2月に市制が施行されると、奈良市は政治、文化、交通の中心となる県都として発展しました。

●国際文化観光都市としての発展と宅地開発の進行

奈良は幸いにも第二次世界大戦の大きな戦禍を免れ、貴重な自然や文化財を残すことができました。1950年(昭和25年)「奈良国際文化観光都市建設法」が住民投票の結果を受けて成立し、奈良市のもつ文化的、観光価値を将来に生かした近代都市づくりを進めていくことになりました。

また、この頃から近鉄学園前駅周辺において宅地開発が進められ、高度成長期に入ってから、西北部丘陵一帯にも宅地開発が広がり、近畿圏における住宅都市としての機能も併せ持つこととなりました。

●関西文化学術研究都市の地域指定と世界遺産リスト登録

1988年(昭和63年)に策定された「関西文化学術研究都市の建設に関する計画」においては、奈良市の「平城宮跡地区」と奈良市を含む「平城・相楽地区」が文化学術研究地区に指定されました。

1998年(平成10年)2月に奈良市は市制100周年を迎え、同年12月には「古都奈良の文化財」として東大寺、興福寺、春日大社、春日山原始林、元興寺、薬師寺、唐招提寺、平城宮跡の八資産群がユネスコの世界遺産リストに登録されました。

●中核市「奈良市」の誕生と合併、その後の都市整備の進展

2002年(平成14年)4月には中核市に移行し、これまで以上に主体的なまちづくりに取り組むことができるようになりました。また、2005年(平成17年)4月には月ヶ瀬村、都祁村を編入合併しました。

旧月ヶ瀬村は豊かな自然と名勝「月瀬梅林」を持つ景勝の地であり、旧都祁村は、伊勢街道の要衝の地として文化交流が盛んな土地がらで、1965年(昭和40年)の国道25号(名阪国道)の開通以降、工業団地や住宅の開発も進んできた土地です。

2006年(平成18年)3月には、「けいはんな線」が開通したことで、西北部地域と大阪・東大阪沿線エリアとの結合が、2009年(平成21年)3月には「阪神なんば線」が開通したことで、阪神エリアとの結合が容易になり、人・物・情報・文化・産業の交流が一層活発になっています。2010年(平成22年)には、平城遷都1300年を記念した行事が奈良市内でも多数開催され、多くの人が奈良市を訪れました。

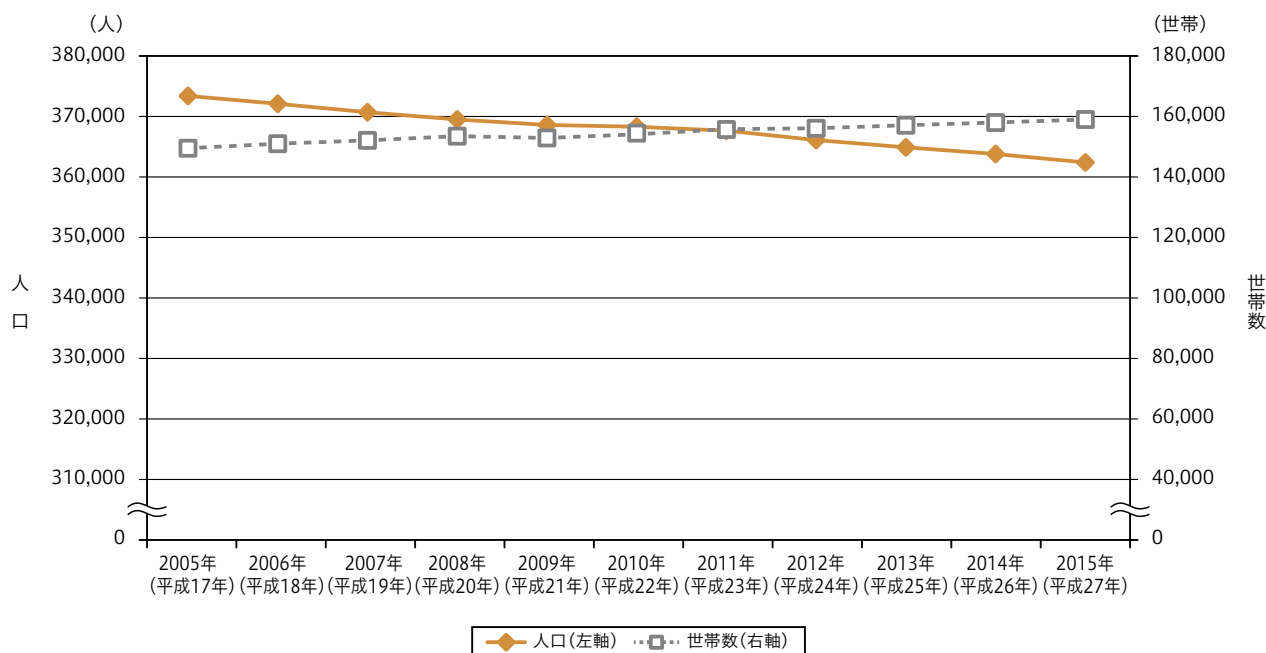
② 奈良市の人口・観光客数

①人口

本市の人口は、2005年(平成17年)の約37.3万人から減少傾向が続いており、2015年(平成27年)には約36.2万人と、約1万人減少しています。

一方、2005年(平成17年)に約14万8千世帯であった世帯数は、単身世帯の増加を背景に増加を続けており、2015年(平成27年)には約15万9千世帯と、約1万世帯増加しています。

【人口・世帯数の推移】



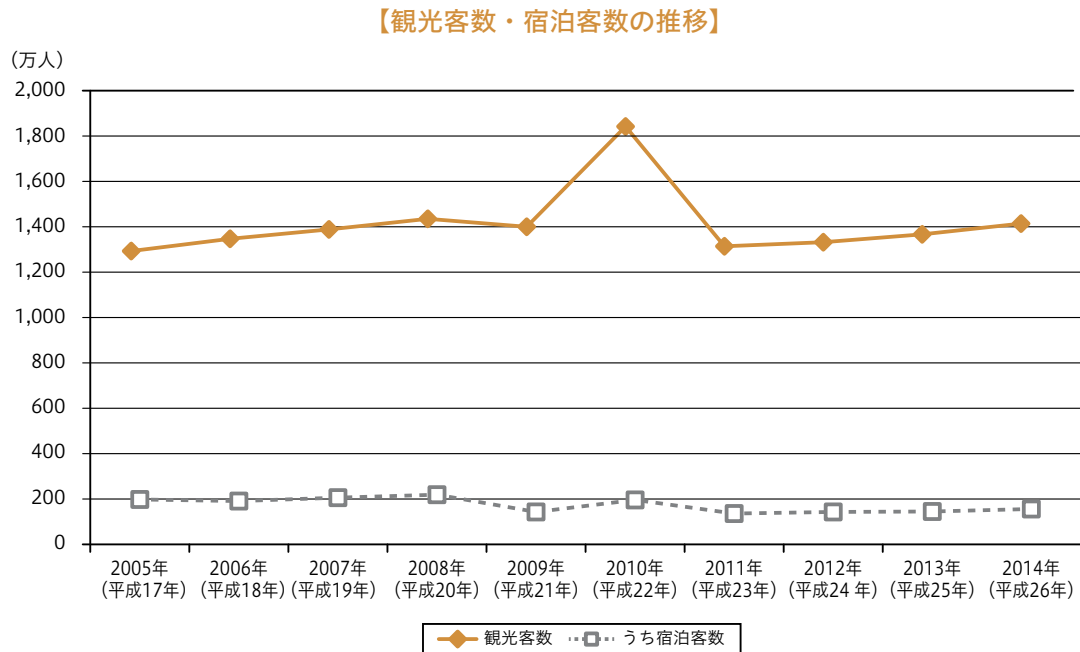
(注) 各年10月1日現在。

(資料) 奈良市「住民基本台帳」(2012年(平成24年)までは「住民基本台帳」と「外国人登録」の合算。)

②観光客数

本市を訪れる観光客数は、1,300万人から1,400万人の間で推移していますが、「平城遷都1300年祭」の記念行事が行われた2010年(平成22年)には約1,842万人が訪れました。

2014年(平成26年)における宿泊客数(約156万人)が観光客数の総数に占める割合は、約11.0%となっています。



(資料) 奈良市「奈良市観光入込客数調査報告」



